

戦場カメラマン

渡部 陽一 さん

旅と仕事と人生と

——それは「戦場で泣いている子どもたちの声を届けたい」から始まった。

爆撃や銃撃戦がいつ勃発するかわからない戦地で、命がけて写真を撮る…ハードな印象の「戦場カメラマン」でありながら、その語り口調はソフトでマイペースである。一眼レフカメラを携え、世界の紛争地域で取材を続けている渡部陽一さんに、仕事を通じて見えてきたこと、その思い、ご家族のことなどを伺った。

PROFILE >

【わたなべ・よういち】1972年、静岡県富士市出身。明治学院大学法学部卒業。学生時代から世界の紛争地域を専門に取材を続ける。戦場の悲劇、そこで暮らす人々の生の声に耳を傾け、極限の状況に立たされる家族の絆を見据える。イラク戦争では米軍従軍取材を経験。ルワンダ内戦、コソボ紛争、チェチェン紛争、アフガニスタン紛争など世界各地で取材を重ねている。著書は『戦場カメラマンの仕事術』（光文社新書、2016年）、『硝煙の向こうの世界 - 渡部陽一が見た紛争地域 -』（講談社、2012年）等。2013年からは富士市観光親善大使も務めている。オフィシャルサイト <http://yoichi-watanabe.com/>

——渡部さんは戦場カメラマンとして20年以上、紛争地域をメインに取材を続けてこられています。そもそも戦場カメラマンになろうと思われたきっかけは何だったのでしょうか。

20歳の時、大学の授業でアフリカのジャングルで暮らす少数民族のことを教えていただきました。今でも狩猟生活をしているというその民族に直接会ってみたいと思い、アルバイトで貯めたお金を元に、バックパッカーとして当時「ザイル」と呼ばれていた現在のコンゴ民主共和国に行っただけです。

1993年当時、隣国のルワンダではツチ族とフツ族の民族紛争が勃発し、内戦はザイルにも飛び火していました。その状況を全くと言っていいほど知らないまま旅行者として訪れた僕にとって、戦火から必死に逃れてきた多くの避難民の子どもの出会いは大きな衝撃でした。

自分の目の前で起きているこの悲惨な状況を伝える方法はないかと考え、もともと大好きだったカメラを使えば写真を通じて知ってもらえるのではないかと思ったことが、戦場カメラマンへの入口でした。

——確かに、紛争地域で暮らす子どもたちの姿は、日本ではなかなか想像しにくいですよ

目の前で起きているこの悲惨な状況を伝える方法はないかと考えたことが、戦場カメラマンへの入口でした。

ね。だからと言って、戦場での取材に身を投じることは簡単ではないと思います。これまで、どのような地域に行かれたのですか。

はじめの頃はザイルに何度も行っていました。そこを起点に周辺のウガンダやチャド、カメルーンなどアフリカ大陸で範囲を広げ、さらに中東、ヨーロッパ、アジア、アメリカ大陸と、自分の気持ちが強引きつけられた場所に足を向けていました。

現地では暮らす方々に直接自分で会い、現地の状況を見て、聞いて、触れてみて、そこから新たに見えてきたことや気づいたことを、取材メモとして記録したり、写真を撮ることを、今もずっと続けています。

——危険な地域に行かれることについて、ご両親は反対されませんでしたか。

両親に気苦労をかけていたことは確かです。その気苦労を少しでも減らすため、両親と約束していたことがあります。それは、どこへ行っても毎日必ず電話をかけること、肉筆の手紙を書くことです。用事がなくても、一日に何度も、しつこいくらい連絡を取る。それが、カメラマンとして外国に行く条件の一つでした。

——毎日何度も電話をかけられていたんです

か！ しかも、渡部さんが行かれていたのは、電話をかけることが難しい地域ですよ。

はい。ですが、電話をかける方法を探ることも取材なんです。通話が途中でシャットアウトされないか、盗聴による音の変化はないかなどを知ることが、現地の状況が見えてきます。

当時、僕が訪れていた国にはビジネスマンや旅行者専門の国際格安電話仲介所のような場所があったので、そこから「元氣だよ」や「今はザイルから中央アフリカに入った。またかける」の一言だけでも、密に連絡を取る。この約束は、今も守り続けています。

——今でも、なんですね。戦場カメラマンとしての仕事は、どのようにされているのですか。

自分が撮った写真を日本や外国の新聞社や通信社、出版社などに送って、掲載されればギャランティが頂けるというフリーランスのカメラマンが僕の基本スタイルです。ただし、日本の新聞社や通信社と契約を結んでいた時期もあります。

——取材先は、どのように選ばれるのですか。

世界中で知り合った友人や仲間たちから入ってくる情報を基に、判断することが多いです。その情報と、日本で入手できる国際情勢の情報にギャップを感じたり、何か変化を感じ取ったら現地に入って取材を進めておき、新聞社や通信社に情報提供を求められたいらすぐに、写真とテキストを送ります。

僕は爆撃など激しい動きのある前線の写真を撮ることが多いのですが、それだけではありません。現地に入って何より驚いたのは、

戦場という非日常の中でも 繰り返される人々の日常に、 僕はすごく引き込まれました。

戦場であっても日々の暮らしを続けている人たちがほとんどだということです。お父さんが市場で手に入れてきたわずかな食料を子どもたちに食べさせたり、子どもたちを学校に見送ったり、繰り返される日常というのは、日本人の僕たちとあまり変わらないんですね。戦場という非日常の中でも繰り返される人々の日常に、僕はすごく引き込まれました。食料はどこで調達し、乳飲み子のミルクのお湯はどこで沸かすのか、水は蛇口から出るのか、井戸なのか、川なのか。そうした生活の原点、家族や子どもたちの日常を記録に残していくことを、国を問わず続けています。

——日本にいて、普段のニュースでは見ることのないシーンですね。

国内のテレビや新聞では、生活に密着するニュースが優先されるのは当然です。僕は、その次の段階でどんなニュースが選ばれているか、注目しています。

フリーランスの場合、取材費は全部自分で持ちます。ですから、新聞社や通信社などに送った写真が1点も使ってもらえなければ、すべてが赤字です。それでもコンスタントに現地に入り続け、取材を続けていけるかどうかは大きな壁になります。

——取材を続けていけるかどうか、ですか。

帰国して日常生活に戻った後も、また取材に行こうと思っているし行けるはずなのに、行かないケースが結構多いんです。例えば、国内で別の仕事があるとか、約束が入ったとか、世界と日本との関係性などいろいろあるうちに情勢が変わってしまい、結局取材に行かないまま終わったりします。二の足を踏むことで、取材のタイミングを逃してしまうのです。そうしないために、僕は理屈抜きで飛び込んでいく。「これは！」と思ったらすぐに、パスポートを持って空港へ向かうように意識していました。

——あえて何も考えずに、飛び込むと。

そうですね。とにかく日本から出る。目的地まで入らなくても、一旦バンコクやイスタンブールに入って、自分の熱量を切り替えて、状況をしっかりと整理してから、再度GOをかけるかどうか判断する。初期の頃は特に、そういうやり方をしていましたね。

その感覚を自分の体に染み込ませて染み込ませて……としていくうちに、いつでも熱を持っていた状態で動ける、スタンバイの状態を維持できるようになりました。これは戦場に限りず、フリーランスのカメラマン皆さんが持つて

いらつしやる感覚だと思っています。

ここ数年は国際情勢の変化が非常に早く、世界中どこへ行っても紛争やテロ事件が起きます。その中から自分が引きつけられる国や地域、情勢、国民性などから取材先を選んでいます。

——取材には、どんな思いで臨まれていますか。

世界では今も戦争や紛争が繰り返され、そこには犠牲となっているたくさんの子どもたちがいます。「戦場で泣いている子どもたちの声を届けたい」という気持ちは、20歳の時から変わらず、僕の体の中を鉄の柱のように貫いています。

——ということは、子どもたちが悲しんでいる姿を撮られているのですか。

悲しい一面だけでなく、嬉しい一面も撮ります。日本で暮らしていると想像しにくい日常にハッと気づいた時に、シャッターを切ることが多いですね。例えば、日本のアニメを観て笑っている顔や、1日1回の食事の後に浮かべた笑顔などです。

僕は現地の家族の中に入って、何カ月も生活を共にしながら取材することが多いのですが、日本人にとっては衝撃的なほど、喜怒哀楽をむき出しにしてくるんですね。

——よその国の人がカメラを持って自分たちの生活に入り込んできても、むき出しの感情を出してくれるんですか？

僕の経験では、ほとんどの国の人々が相手が外国人であろうが知らない人であろうが、温かく迎え入れてくれました。食料が不足して



©渡部陽一

紛争地域の子どもたちと駐留米軍の兵士に、こんな交流があるとは！

いたら自分たちの分を減らしてでも、もてなしてくれました。ゲストに自分たちのきれいな部分を見せようというのではなく、生活の一部として人をもてなす習慣が根づいているのです。それは、歴史や風土により育まれてきた、家族を守り生き抜くための術でもあります。陸つながりて国境を接する地域では、民族や宗教が入り乱れながらうごめいているので、風の流れを知り、受け入れていかないと、生活を守れないのです。

そのような背景もあり、相手をリスペクト

して向き合うという根本的な姿勢が、すぐくシンプルで奥深く、ゆえに引きつけられる国民性の人が多いと感じています。

——仕事を通じて多くの人々と深く関わってこられてきたからこそ、そういったところにも気づけるのでしょう。そんな渡部さんにとつて、戦場カメラマンという仕事の魅力は何ですか。

一つは、世界中に家族のような友人ができることです。仕事抜きで地元の方に接するように僕に接してくれたら、結婚式に呼ばれたり、家族が増えた報告をしてくれたり、そういった友人たちは僕にとって大きな支えであり、力となっています。

もう一つは、歴史の瞬間を自分の目で確認できることです。カメラマンとしてその瞬間に立った時、ゾクゾクするほど胸が揺さぶられます。

——歴史の教科書にこれから書き加えられていく大きな出来事を、目の前で見られると。

そうです。僕は、世界の歴史は100年単位くらいで繰り返されていると感じています。今の世界の情勢は、1900年代前半の第一次世界大戦前と似ている気がします。戦争してはいけないと皆わかっているのに、

局地的な戦争が繰り返され、それがつながって大きな輪になっていく。不思議な絡み合いや偶然が重なり、渦のようになって戦争になつていったのだということは、歴史を振り返った時、後から気づくことが多いものです。

僕たちが今生きている2017年という年は、激動の時代の過渡期にあり、後世の人が見た時、最も混乱している時かもしれないと感じています。

——数多くの戦場で取材されてきた経験を経て、戦争はなくせろと思いますか。

僕の夢は、世界中で戦場カメラマンという職業がいらなくなって、学校カメラマンになることです。世界中の学校を訪ねて、子どもたちが学校で勉強したり、給食を食べたり、遊んだりして笑っている姿を撮ることです。その夢が実現できる環境に、一日も早く近づいてほしいと願っています。

人類の歴史上、戦いがなくなったことは、ほとんどありません。ですが、戦場報道の写真を見て人々が何かを知ったり、気づくことで、情勢を動かすきっかけになつてほしいという思いは持っています。

——そう言えば、2年前に、トルコの海岸でシリア難民の男の子が溺死している写真が世

僕の夢は、世界中で戦場カメラマンという職業がいらなくなつて、学校カメラマンになることです。

界中で波紋を呼び、難民問題の解決に向けて各国が動いたことがありましたね。あの時は写真の影響力の大きさを見せつけられました。写真1枚で戦争をなくすことは難しいけれど、人々が考え続ける原動力となれるような写真を、戦争がなくなるまで撮っていききたいと思っています。

——取材対象は絞られているのですか。

一步引いて、欲張らない取材をすることで、再度トライできたり、新たな一面が見えてきたことが何度もありました。

取材現場では、すべてを見たいと思って動いています。テロも、医療も、日常生活も、ジャンルを問わずにとらえていきます。

——テロと日常生活では、取材する際の体制が違うような気がします。……
戦場カメラマンと聞くと、自分から戦場に飛び込んで行って写真を撮るイメージかもしれませんが、実際は「銃撃戦を撮るぞ」と

狙って行っても、遭遇することは難しいんです。従軍記者として軍隊に入り込み、兵士と一緒に進軍しながら撮影する方法もありますが、それだけではありません。

現地の家族と一緒に生活をしながら取材していると、いきなり銃撃戦が始まり、わずか4分間ほどで終わって、またスーッと日常に戻っていく。その繰り返しなんです。そのような状況で爆撃や銃撃戦の場面を撮影するためには、いかにして情報をとらえていくかが大事です。いち早く情報をとらえ先回りして行くと、遭遇するケースが多いからです。

主な情報源はその国で生まれ育ったガイドさんや通訳の方、セキュリティの方ですが、さらに、その地域の部族出身者だけが知っている情報や協力体制などを、現地で生活しながら入手していきます。インターネットにはない情報、部族長の方からのじかの情報を、爆撃を受け銃撃戦となっている前線から逃げながらもとらえられるかどうか、戦場報道のカギとなります。

——そのような死と隣り合わせにあるような危険な取材で、「自分の命を守るための危機管理は、どのようにされているのですか。」

戦場報道の場合は、「欲張らないこと」「引く勇気を持つこと」「ガイドさんの言葉に従うこと」の3つが、僕の危機管理の基本です。

20代の頃は前へ前へという気持ちで取材していたのですが、そうするとトラブルに巻き込まれたりケガをしたり機材を壊されたりして、取材そのものが成立しないことが多かつ



たんです。逆に一步引いて、欲張らない取材をすることで、再度トライできたり、新たな一面が見えてきたことが何度もありました。

緊急時の避難経路については、陸路ならここ、それがダメならここ、国境越えはこうするといった具合に、複数のパターンを覚えておきます。細胞分裂のようにいろんなパターンを用意しておくことは、危機管理だけでなく、そこから未知の出会いにつながっていくこともよくあります。

撮影した写真が1枚も掲載されなかったとしても、現地へ行けば必ず手にするものがあります。それがその後の取材につながります。

ですから、取材に行つて無駄だったと思つたことは一度もありません。僕はむしろ、取材に行つても形にならないんじゃないかと思つた時こそ、行くようにしています。あえて、そういう時こそ狙います。そうやって動いてきたことのひとつ一つが、僕の戦場カメラマンとしての土台をつくっています。

——その取材スタイルは、「結婚されお子さんが生まれてから、どう変わりましたか。

家族を持つてからは、取材期間を短くしました。以前は10カ月、3カ月と長期スパンで行っていました。今は数週間程度です。その分、回数を増やしていますし、これまでに培ってきた人脈や経験から、取材全体の構図を考えたり段取りを整えるなど、事前の準備をしっかりすることで補うことができます。

取材する時も、爆撃や銃撃戦など激しい場面はもちろん撮るんですけど、そこで暮らす

家族や子どもたちに、自然と気持ちが入っていくようになりました。

——家族ができたことで、新たな視点ができたということでしょうか。

そうですね。夫としての気持ちが増えたり、8人、10人と子どもたちを育てている同世代のお父さんの気持ちがすぐ感じ取れるようになりました。

——具体的には、どのようなことですか。

例えば、紛争地域で水も手に入らない中、ケガをした子どもをどうやってケアしたらいいのだろうか、食料はどうやって手に入れたらいいのだろうか、学校の送り迎えはどうすればいいのだろうかといったことです。

戦場カメラマンとして爆撃や銃撃戦の場面に撮影することも重要なんです。他を蹴散らしてまですることではない、と思うようになりました。

——以前はもっと違ったのですね。

そうですね。特に駆け出しの頃は、取材したものをとにかく形にして次の紛争地域に早く行かなければという、突き刺さるような取材をしていました。それに比べ、今はもっとやわらかくなりましたし、自分の中で今までになかった感情が湧き上がってきたり、考え方が

をするようになってきました。

——取材現場で夫や父親として気づくことが多いという事は、普段から家事や子育てに関わっていらっしゃるということですか。

忙しい毎日の中で、自分のできることは積極的にどんどんやって、家族の生活のリズムをつくっていくようにしています。

紛争地域を回ってきているので、家族で生活している日常も、当たり前のように当たり前にじゃないというのは、いつも感じています。

日々の暮らしの中で、自分が思つたことや感じたことを子どもに伝え、一緒にいろんなものを見たり触れたりする機会を、力むことなく自然につくっていくと思っています。

僕自身も影響を受けたのは両親であり、世界中で出会ったいろんな国の家族でした。その暮らしぶりや考え方、姿勢に憧れたり、逆に驚いたりしてきました。

——世界には、いろんな家族の形があるんでしょうね。

僕が世界の家族から学んだことは、どんな時でも家族は必ず一緒だということです。食べ物がなくとも、薬や毛布がなくても、家族や親族が一緒にいることで、一日一日の暮らしを守っていくことができるということです。

僕はむしろ、取材に行つても形にならないんじゃないかと思つた時こそ、行くようにしています。



——家族と一緒にいたくても、渡部さんの場合、仕事柄一緒にいられないことも多いと思います。お子さんから「もっと一緒にいたい」と言われたりしませんか。

取材先に「お父さん早く帰ってきて」と電話をかけてくれることはあります。

ただ、僕はフリーランスのカメラマンですから、時間は意外とつくれるんですね。冷静にスケジュール表を眺め、行動を振り返ってみると、意外と時間はある。

取材先で外国のカメラマンやいろんな職種の人たちを見て「なぜ、外国の人たちは皆、こんなにゆったりした時間を過ごしているのだろうか?」と不思議でした。日本人もビジ

ネスタンスはあまり変わらないはずだと思っていたんですけど、外国の人たちをよく見ていると、メリハリをつけて仕事をしているんですね。週末は100%家族と過ごす時間だから、理屈抜きで仕事は一切入れない。仕事はそれ以外の時間でしつかりする。そういうリズムを整えているんです。

会社に勤めていると勤務時間があるので難しいですが、フリーランスのカメラマンはフリーという名の通り「自由」。だから、僕も取材の時以外は、ほとんど家族と一緒にいます。

「家族との時間を大切にする」という言葉が出てくる以前の、「基本的に、家族は皆一緒に家にいる」。それが世界を回り、いろんな家族を見てきた、僕の憧れですね。

——お父さんがずっと家にいると、収入面が気になりますか…。

日本人から見れば、外国には「本当に仕事をしているのかな?」と不安になるようなお父さんがたくさんいますが、そういうお父さんでも仕事は結構しているんですね。一つの仕事じゃなくても、細かな仕事をいくつもやって収入を得ている。世界には、そういった生活文化があるんですね。

——渡部さんも、フリーランスの戦場カメラ

「基本的に、家族は皆一緒に家にいる。それが世界を回り、いろんな家族を見てきた、僕の憧れですね。」

マンとして取材を続けていけるのでしょうか。

戦争がなくなり学校カメラマンとして世界を回りたという夢は、ずっと持ち続けています。それと同時に、世界を回れば回るほど、たくさんの人に出会えば出会うほど、もっと世界を知りたいという思いが広がってきています。世界も、日本国内も、カメラを持つてもっともっと旅したいですね。

——奥さまとお子さんも一緒にですか。

はい。家族で旅したいですね。

多くの国々では、旅も家族と一緒にです。そのスタイルもバックパッカーだったり、留学のように家族で興味があることを学んだり、山小屋を借りて自炊するなど様々です。家族で時間を共にしながら旅することが、日常生活の一部になっているんですね。

僕も原点となったバックパッカースタイルで、ゲストハウスに泊まり、長距離バスや寝台列車に乗って、一つの国を何週間もかけて転々とした。以前は独りぼっちの旅でしたが、今は妻と息子と一緒に、自分が今までたどってきた国々を旅してみたいです。

——いつか実現できるといいですね。本日はステキなお話を、ありがとうございました。

(インタビュー／ライター 更田沙良)